

ラテンアメリカ都市物語

＝ 第6回 ＝

巨大文化都市 メキシコ市

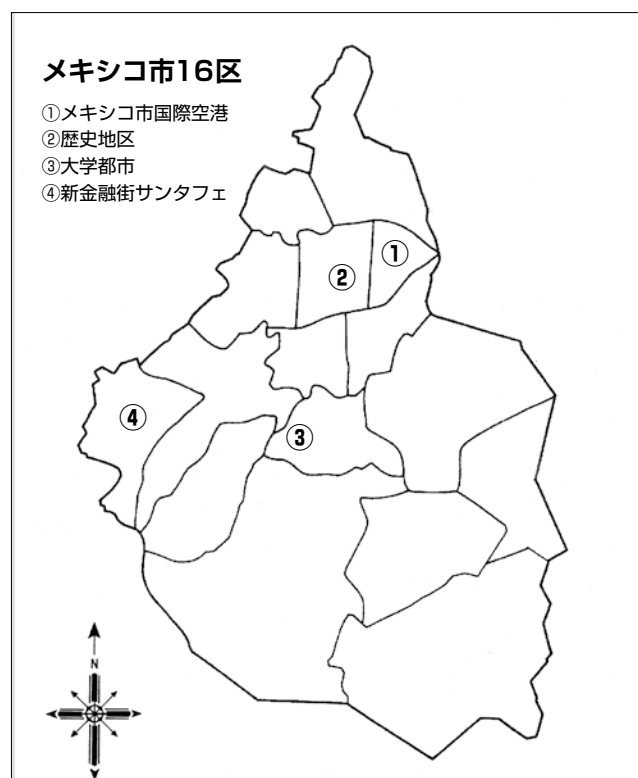
国本 伊代

メキシコ市は「人口2,500万の巨大首都」としてよく紹介されるが、地図でみるような16区で構成される行政区画上の首都人口は1,000万人以下である。2,500万人という数字は、メキシコ市を取り囲むメキシコ州の隣接都市の人口を含む首都圏の概数人口である。

メキシコ市は、国土面積197万km²（日本の5倍強）に日本の総人口とほぼ等しい1億2,700万人（2016年世界銀行のデータ）が住むメキシコ合州国の首都である。2016年1月29日まで連邦特別区（D.F.）と呼ば

れていたが、現在の正式名称はメキシコ市（CDMX）で、このCDMXマークは市内のいたるところで目に付く。連邦特別区からメキシコ市へ名称変更した後の首都機能の変化を紹介するスペースはないが、他の31州と同格になるには、連邦政府機能がそっくり移転しない限り、あるいは憲法を改正しない限り、メキシコ市は特殊な地位にあり続ける。メキシコ市民には1997年まで市長を選ぶ権利がなかった。それまでのメキシコ市長の地位は、大統領が指名する閣僚レベルのポストであったからである。市民が選出した1997年以降の歴代市長の座は中道左派の民主革命党（PRD）が守り続けており、概ね革新的な市政が続いている。

メキシコ市は、博物館の数ではパリに次ぐ世界第2の文化都市である。世界的に有名な国立人類学博物館を筆頭に、市内には160以上の美術館と博物館がある。



メキシコ市（CDMX）を構成する16区



CDMXマークを付けたシクロタクシー（写真はすべて筆者撮影 2017年）

そのジャンルは広く、単に展示会場であるだけでなくさまざまなイベントが企画され、市民に文化活動の場を提供している。毎月最後の水曜日には、約 40 の美術館と博物館が夜の 7 時から 10 時まで、日中に来館しにくい学生や仕事を持つ市民のために「博物館で過ごす夜」というイベントを開催し、コンサートやトークショーなど様々なイベントを催している。ちなみに市南部に位置するメキシコ国立自治大学 (UNAM) は市内最大の文化施設が集中している大学都市にある。UNAM 自体がキャンパス外のものを含めて 23 の博物館を持っている。学術研究教育都市として 1950 年代に市南部の溶岩地帯に建設されたこの国立大学は、まさにメキシコ市の文化活動の拠点でもある。ラジオ局とテレビ局を持ち、広大なキャンパスでは毎日多様なイベントが開かれてその多くが UNAM テレビ局を通じて放映される。南北アメリカ大陸最大規模の「学生数 30 万人以上」を誇り、世界遺産にも登録されているラテンアメリカを代表する名門校 UNAM は、メキシコ市民だけでなく、メキシコ全国民が誇る学術研究と文化の中心で、メキシコが生んだノーベル賞受賞者 (平和・文学・化学) 3 名はいずれも UNAM 出身者である。



UNAM 中央図書館外壁に描かれたオゴルマンの壁画

メキシコ連邦政府の政治・経済・文化の中核機関が集中しているメキシコ市首都圏の経済力は国内総生産 (GDP) の 20% 前後を占め、ペルーの GDP にほぼ匹敵する。このような世界有数の巨大な経済都市でもあるメキシコ市には、どの大都市にも共通する顔がある。高層ビルが林立するビジネス街、中小の多様な商店がひしめく商店街、観光客が必ず訪れる歴史的建造物や名所、文教地区、高級住宅街、庶民の住宅地区、工場

地区、貧民街など、立ち位置次第でメキシコ市の景観は大きく異なる。しかし、メキシコ市の最大の特徴はその地理的条件と首都としての機能が 500 年以上も続いていることであろう。

メキシコ市は周辺を海拔 3,000m 級の山々に囲まれた亜熱帯の盆地に位置し、都心部の標高が 2,240m という高原都市である。もともと外部への排水路のないテスココ湖の小島に、アステカ族が神託に従い 14 世紀に定住して、運河を張り巡らしたアステカ帝国の首都テノティティランを建設した。やがて 16 世紀初期に始まるスペイン植民地時代の 300 年間に現在の都心部の歴史地区が形成され、1989 年にユネスコの世界遺産に登録されている。元テスココ湖の脆弱な地盤の上に市街地が拡大し、さらに周辺の山麓へ市街地がよじ登るように広がっているのが 21 世紀のメキシコ市の姿である。

テスココ湖は干拓によって面積を大幅に縮小しながらも、現在でもメキシコ市の東部に存在する。その周辺一帯は塩分蓄積濃度が高く、不毛の土地で、地方から出稼ぎに来た人々が不法に占拠して住みつき、ほぼ半世紀の歳月をかけて形成されたのが首都の北東部に隣接する人口 100 万を越すネサワルコヨトル市である。さらにその東側湖岸の脆弱な国有地に新メキシコ市国際空港の建設工事が完成 2020 年を目指して進んでいる。現在のメキシコ市国際空港から約 15km 北東に位置するこの新国際空港はイギリス人建築デザイナーによる設計で、24 時間稼働のラテンアメリカ最大の空港となる予定である。

市の中心地区から東へ 8km にある現在の国際空港はどの方向から飛来しても着陸態勢に入るとメキシコ市の真上を低空で滑走路へ降りるスリリングなコースをとることから、周囲を山並に囲まれた盆地に広がる巨大都市の姿を眼下に一望することができる。この現在の空港から 14km ほど西に進んだところがメキシコ市の中心部で、アステカ帝国の征服者エルナン・コルテスがアステカ帝国の首都を徹底的に破壊したその上に、スペイン植民地の副王都市が建設され、現在のメキシコ市の歴史地区になっている。

この歴史地区にある 100m 四方の中央広場 (正式名称は憲法広場) は、東側に国立宮殿、北側にカトリック教会のメトロポリタン大聖堂、その真正面の南側にメキシコ市庁舎、西側にはアーケードのある商店街が取り囲んでいる。国立宮殿は、コルテスの大邸宅から

植民地時代の副王庁となり、独立後には大統領政庁となった。特別な行事がない限り観光客に開放されており、北側の入口から入り、本館2階へ上る中央階段の壁一面にディエゴ・リベラが描いた有名なメキシコ歴史絵図を見ることができる。但し、国立宮殿は現在では大統領政庁機能の一部を残して博物館となっており、大統領の執務の中心はチャプルテペック森林公園地区にある通称「ロス・ピーノス」と呼ばれる大統領政務室である。



メトロポリタン大聖堂

憲法広場の中央部には高さ 30m の国旗掲揚柱が立ち、毎朝 6 時に国旗掲揚の儀式が 10 数名の兵士たちによって行われる。独立記念日の前夜には国立宮殿の 2 階バルコニーに大統領一家が姿を現し、広場を埋め尽くした市民の前で「ビーバ・メヒコ！」（メキシコ万歳）を叫ぶのが毎年の恒例行事である。翌 9 月 16 日の独立記念日パレードはここからスタートし、歴史地区の西側のレフォルマ大通りにある 1910 年に独立 100 周年を記念して建造された独立記念塔まで行進す



国立宮殿内のディエゴ・リベラによるメキシコ歴史絵図

る。憲法広場ではこのような重要な国家行事や大規模な抗議デモが繰り上げられるほか、市民を楽しませる様々な行事が年間を通じて催され、「独立の月」と呼ばれる 9 月とクリスマス・シーズンには憲法広場はイルミネーションで華やかに飾り付けられる。このようなメキシコ市の中心である歴史地区には、植民地時代の建造物が数多く保存されている。数多く存在する旧カトリック教会関係の建物のすべては 19 世紀半ばのレフォルマ時代に国有化され、礼拝堂のみは国から貸与されていて宗教行事が執り行われ、メトロポリタン大聖堂を代表する主なカトリック教会の礼拝堂は植民地時代の絢爛豪華さを残している。



レフォルマ大通りの高層ビルと独立記念塔

メキシコ市の近代的な顔をみせているのが、歴史地区から西へ向かった地区である。都心に近い南西部には、19 世紀後半から 20 世紀初期にかけて開発された旧高級住宅街がある。当時ヨーロッパで流行していたアールデコやアールヌーボーの建築様式を取り入れた旧豪邸が数多く残っており、現在では中産階級上位層が好んで住む緑豊かな住宅街である。一方、超高級住宅街は都心部からさらに遠く、新たに開発された南西部に点在している。戸建からなる住宅地は 3m を超す塀で囲まれていて内部を外から見ることが出来ない。2～3 台分の車庫のある 500～800m² の大邸宅で、家事使用人が複数住み込んでいるのが普通である。このような高級住宅街に住む人々の生活圏は、中産階級を含めた庶民の生活圏とは全くの別世界である。

一方、市民が自由楽しめる商店街や商業施設、そして大小の公園がメキシコ市内には数多くある。そのなかでも都心に近いレフォルマ大通りは緑豊かなオフィス街であるだけでなく、市民の憩いの場でもあり、

メキシコ市の環境保全のための重要な緑地地帯となっていて、日曜には自転車天国となる。パリのシャンゼリゼを模して建設されたこの公園通りには樹木の生い茂った遊歩道がある。大気汚染が最悪だった1990年代には公園通りを覆う木々は枯れ果てていくような姿だったが、2017年のレフォルマ大通りは緑に溢れている。しかもこの数年の間に完成した高層ビルが立ち並び、10年前にメキシコ市を訪れただけの人には別世界に見えるであろう。そしてこのレフォルマ大通りの西側は誰もが憧れる高級住宅街・高級ブティック街となっており、多くの大使館が集中している。さらにその西側に続く中央盆地の西端の崖を登るように高度を少しずつ上げて広がる緑深い森と谷底のような地形に超高級住宅街が広がり、そして行きつくところがサントフェと名付けられた超近代的な商業・金融街である。林立する高層ビルと奇抜な造形美を誇る建造物からは、かつてのごみ捨て場であったことを想像するのは難しい。

すでに紹介したようにすべての教会関係建造物と土地が19世紀半ばのレフォルマ時代に国有化された歴史のあるメキシコでは、信仰のための礼拝堂を除く旧カトリック教会関係の壮大な建物のほとんどは全国で博物館・美術館・学校・公共施設などに転用されている。しかし国民の65%はカトリック信者であり、年中行事の多くはカトリック信仰に関連しており、新生児のほとんどが洗礼を受けてカトリック信者となる。宗教が教育に介入することは禁じられている一方で、カトリック教会が運営する私立学校は人気が高い。メキシコのカトリック教会はバチカンに上納金を支払えないほど貧しいという話と豊かな資金を持っているという正反対の見解があるが、1985年の大地震で受けた損傷の大掛かりな修復作業を終えたメトロポリタン大聖堂はスペイン植民地時代の栄華の粋を余すところなく見せてくれる。

同時に憲法広場を挟んでこの首都大聖堂と対面しているメキシコ市庁の反カトリック的政策も興味深い。2017年6月には、派手で賑やかなLGBTの行進を楽しむためにレフォルマ大通りは人で埋め尽くされた。メキシコ市は同性結婚とその養子縁組を認め、世界でも最先端に行くLGBTに寛容な政策をとっている。

他方、このような巨大都市メキシコ市はまた貧富の格差の大きい都市の典型でもある。市内を網の目のように走る路線バス、主要幹線道路につくられた専用道



18周年を記念する「30歳以上レスビアン・グループ」

路を走るしゃれたメトロバス、12路線からなる地下鉄は、一般庶民層が利用する交通手段である。しかし中産階級の中以上の人々がこれらの公共交通機関を使うことはほとんどない。地下鉄は一律5ペソ（約35円）と安く、貧しい人々はメキシコ市周辺部の自宅から2時間以上もかけて乗り継ぎながら職場に通う。バス路線や地下鉄の駅周辺に広がっている立ち食いの屋台なども30年前の姿とあまり変わらない。通路にわずかな商品を並べている物売り、交通信号待ちの車両の列を駆け巡る売り子や地下鉄車内の物売りも健在である。治安はあまりよくないが、それでもこの巨大都市は最貧層の人々の暮らしを抱えながら、最新の技術と最先端の流行を追い続ける、魅力的な文化都市である。

（くにもといよ 中央大学名誉教授）



2017年の9月（独立の月）の飾りつけをしたメキシコ市庁舎